

原 著

スクールソーシャルワーカーの視座とかかわりに関する実践分析(2)

—子どもや家庭への視座とかかわり, 価値観—

茶屋道拓哉¹⁾・岩永 靖

A practical analysis of the values and perceptions of school social workers on school children and their family environment

Takuya CHAYAMICHI & Yasushi IWANAGA

本研究は、スクールソーシャルワーカー（SSWr）が対象となる子どもや家庭をどのように捉え、かわってきたか、またその際に重視された専門職としての価値観を把握するために行われた。SSWr10名に個別インタビュー（半構造化面接）調査を行い、質的研究法に従って分析を行った。その結果、「子どもや家庭に対するSSWrの視座」では、《生きづらさへの理解》、《地域密着のSSW活動》などがコア概念として抽出された。また、「子どもや家庭に対するSSWrの実践知・技術」では、《寄り添う》、《第三者としての立場》などが、「SSW実践における専門職としての価値観」では、《視点の共有化》、《内省・自己覚知》などが抽出された。さらに本研究の全体を通して、SSWrは多様な職域・職種の人々と役割や価値観を重ね合わせながら、子ども・家庭・学校を地域社会の一つとして捉え、それらに寄り添い、専門職としての自己に対する内省を行いつつその責務を果たしていることが明らかになった。

キーワード：スクールソーシャルワーカー、視座とかかわり、価値観、質的研究

1. 緒 言

2008年度より文部科学省において「スクールソーシャルワーカー活用事業」が導入され、全国各地域で社会福祉専門職などがスクールソーシャルワーカー（以下、SSWrという）として配置された。本研究は、熊本県におけるSSWrの実践経験を丁寧に振り返り、SSWrが対象となった児童生徒、家庭をどのように捉え、かわりを持ってきたかを明らかにする。そこに生ずる課題や根底にある価値観を分析することで、この地域におけるSSWrの活動の指針づくりやスクールソーシャルワーク（以下、SSWという）実践の基盤整備の一助とすることを目的とする。なお、本研究は前出の「スクールソーシャルワーカーの視座とかかわりに関する実践分析(1) —学校現場への視座とかかわり—」と連動して行われた。ここでは、「子どもや家庭に対するSSWrの視座」、「子どもや家庭に対するSSWrの実践知・技術」、「SSW

実践における専門職としての価値観」についての分析報告と本研究全体の考察を行う。

2. スクールソーシャルワーカーのかかわりと価値観についての一定の整理と問題の所在

文部科学省の「スクールソーシャルワーカー活用事業」に示されているSSWrの役割には、①問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働き掛け、②関係機関等とのネットワークの構築、連携・調整、③学校内におけるチーム体制の構築、支援、④保護者、教職員等に対する支援・相談・情報提供、⑤教職員等への研修活動等、が挙げられている。また、山下（2008a）は、SSWrが学校という枠組みの中でソーシャルワーク実践をしていく上での役割を、「個々の子どもの可能性を発揮するためのサポートという個別的な側面と、集団として子どもたちの生活環境としての学校の改善という、2つの視座を常に保持しつつ、活動を展開することが固有の職として存立するための必要条件である」としている。このSSWrの実

¹⁾ 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

表1 スクールソーシャルワークの限定的実践理論（実践モデル）

実践理論（モデル）	背景理論（包括的理論）	内 容	特 徴
学校・地域・生徒間連携モデル Costin (1973)	システム理論 社会学習理論	三者の関係に変化をもたらす、制度や学校のあり方を改善していくアプローチ 状況の評価とプログラム作りの実施	学校の構造改革を主眼とする変革モデル 焦点は生徒たちの置かれている状況 SSWrと教職員の連携、協力が不可欠
社会的相互作用モデル Alderson (1972)	システム理論 社会科学理論 コミュニケーション理論	子どもと学校との相互関係に焦点を当て障害となるものを取り除くアプローチ	SSWrは仲介者やファシリテーターの役割をする 相互援助システムを創り出すことが目標
伝統的治療モデル Alderson (1972)	精神分析 社会心理学 自我心理学	学校との関係で、社会的、情緒的困難を抱える子どもがうまく適応できるように支援するアプローチ	SSWrは子どもや家族にCW、GW サービスを提供することが役割 学校制度は活動の視野に入っていない
家庭と学校のエンパワメントモデル Shepard (1999)	ライフモデル (エコロジカル・アプローチ) 効力感理論	学校と家庭のパートナーシップ構築のためのエンパワメントモデル（ピラミッド型モデル）	効力感の程度によって各レベルを定義し、人と資源のつながりをレベル別に示す
パワー交互作用モデル 門田 (2000)	ライフモデル エンパワメント理論 システム理論	権威的・権力的パワーを行使する人に対抗するのではなく、交互作用に介入し、良好なパワー交互作用を促進する	介入方法はアドボカシー、グループワーク、協働 人間関係に焦点を当てた実践モデル パワー交互作用マップの紹介
親と学校間の仲介理論 大塚 (2006)	システム理論 ライフモデル エンパワメント理論	学級崩壊を経験した親と学校との間の仲介に焦点を当てた実践理論 親の無力感に注目	当事者のニーズと視点を取り入れた実践理論 親のエンパワメントの必要性を明確にした 質と量のトライアングレーション調査

大塚 (2008) 「スクールソーシャルワークの理論」 p71

践モデルについては大塚（2008）が、対象領域、対象者、対象問題を限定した「限定的実践理論」として表1のように整理している。

さらに、「ソーシャルワーカーが何をやる人なのか」というイメージを呈示することが不可欠であり、SSWrが学校現場でどのような活動をするのかという具体的な形を他者に示すことがSSWに従事する者にとっての課題である」と山下（2008b）は指摘している。ここで言われているようなSSWrの活動を他者に示すべく、SSWrの実践アプローチについては、実践事例に基づいたチームアプローチを分析した小榮住（2010）の報告、不登校事例に対するエコマップ活用から役割評価を試みた大西（2009）の報告、SSW実践時のケース会議運営に必要なスキルとして「①システムへのジョイニング、②エコロジカル・アセスメント、③解決志向のケース会議、④ケースマネジメント」を挙げた大塚（2007）の報告、「①broker ②mediator ③advocator ④linkage ⑤residential work ⑥counselor ⑦educator ⑧protector ⑨organizer ⑩case manager ⑪social change agent」をSSWrの機能と役割として挙げた秋山（2009）の報告など、近年その

関心とともに、多様な報告がなされるようになってきた。その関心の高まりと同様に、教育委員会などへのSSWr配置が全国的に進んでいる。しかし土井（2011）の報告では、そこには多様な背景（アイデンティティ）を持つ専門職（例：元校長、心理職、元警察官、看護師、保健師、保育士、介護福祉士など）も配置されていることが分かっている。このような中では、どのように子どもや家庭とかわりソーシャルワークを実践したかを明らかにし、また、学校で表出した子どもや家庭の困難さを対象とした限定された領域の中でその実践を支えてきた特徴的な価値観を問いつけていく必要があると考えられる。

3. 方 法

対象となるSSWrが職域として未成熟な分野（特に対象となった地域では2008年度より本格実施）であるため、その新しい構造を明らかにする必要性や、対象となるSSWrが少数であること、回答に際してその地域的特徴、対象者の経験、状況といった特殊な条件の影響を強く受けるため、質的研究の方法を採った。質的研究法に基づいて本研究を遂行するにあたって、先に述べた研究の

目的に沿い、個別インタビューを行った。インタビューは半構造化面接とし、その骨子は、子どもや家庭へのかかわりに対し、①「印象や困ったこと」、②「配慮や活用した実践知・技術」、③「SSW 実践を振り返る中で見えてきた価値観」についてであった。なお、インタビュー時間はそれぞれ60分程度、インタビュー期間は2009年11月～12月であった。

インタビューで得られた音声を逐語録としてデータ化し、対象者が語っている内容の意味を解釈しながらデータを読み込んだあと、インタビューの目的に沿ったデータを抽出しつつ、そのデータの意味を表現するラベルをつけ（1次コーディング）、さらにそのラベルの中からいくつかの集団を作る中で抽象度を高めつつ上位の概念を示し（2次コーディング）、帰納的推論を繰り返す中で、最終的に語りの中から得られた本質的命題（現象に一貫して存在する概念：コア概念）を抽出した。

4. 研究対象者の特徴

熊本県内でSSWrとして勤務する10名を対象者とした。10名のSSWrは、女性9名、男性1名であった。全ての対象者はソーシャルワーカーとしての経験が3年以上あり、社会福祉士または精神保健福祉士の国家資格を有している（両方の資格を有する者もいる）。なお、各対象者は教育事務所または教育委員会に配属され、1か所もしくは2か所に配属されている。1週間の勤務は各

所属する組織で異なるが週1日から週3日となっている。

5. 倫理的配慮

本研究（インタビュー調査）を実施するにあたり、研究対象者に口頭と文書で研究の主旨、目的や方法について説明した。自由意志での参加であり、不参加による不利益を被らないこと、研究に同意しても途中で断ることができること、守秘義務、匿名性の保証、データの保管、研究中・終了後の対応方法などを説明した。同意書を作成し、対象者と研究者が署名捺印し、2部作成の上、双方保管することとした。これらの手続きを経てからインタビューに着手した。

6. 調査結果

分析の結果、「子どもや家庭に対するSSWrの視座」については図1、「子どもや家庭に対するSSWrの実践知・技術」については図2、「SSW実践における専門職としての価値観」については図3、のような概念構造図が得られた。また、各項目の分析の結果を以下（6.1～6.3）に示す。表記については、《 》：カテゴリ（コア概念）、〈 〉：サブカテゴリ（2次コード）、「 」：対象者の語り、[]：補足、としている。

6.1 「子どもや家庭に対するSSWrの視座」について

この項目については、《生きづらさへの理解》、

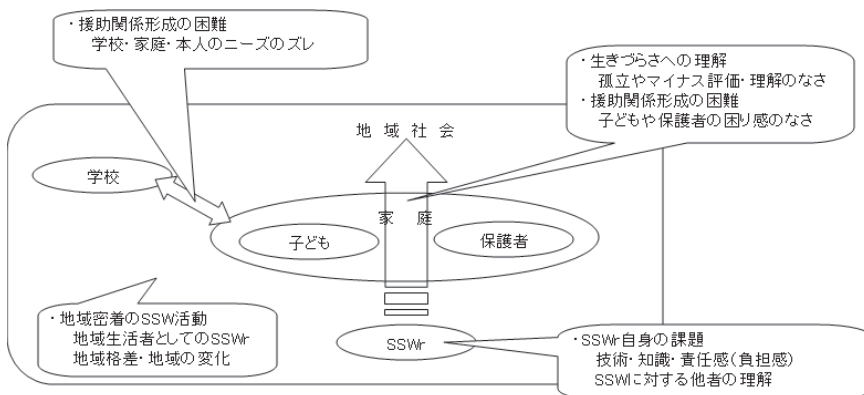


図1 「子どもや家庭に対するSSWrの視座」の概念構造図

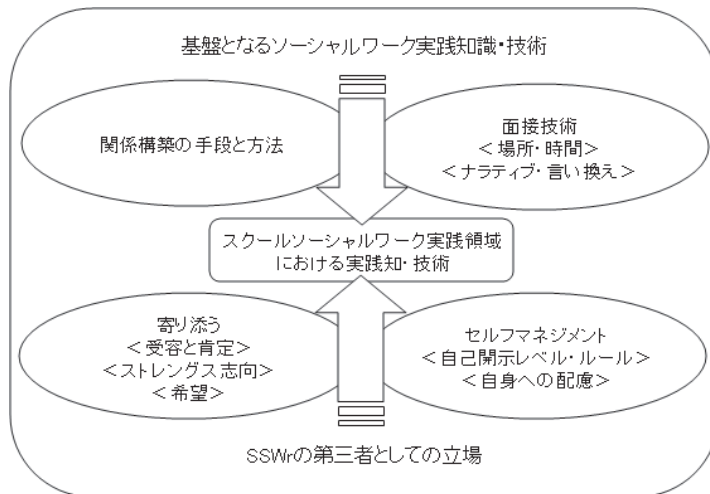


図2 「子どもや家庭に対する SSWrの実践知・技術」の概念構造図

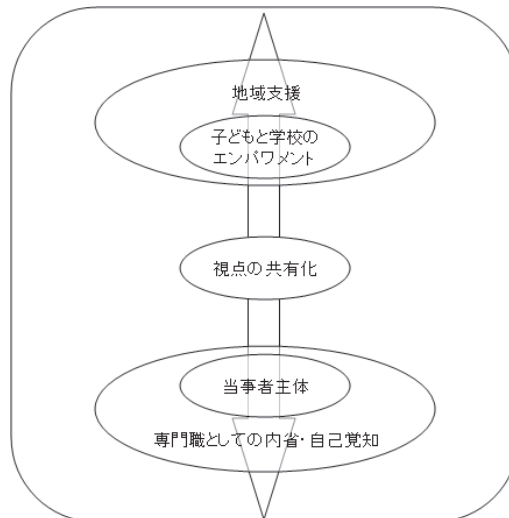


図3 「SSW 実践における専門職としての価値観」の概念構造図

《地域密着のSSW活動》、《援助関係形成の困難》、《SSWr自身の課題》の4つのカテゴリ（コア概念）が抽出された。また、それぞれのカテゴリに付随するサブカテゴリは表1に示すとおりである。

《生きづらさへの理解》では、「新聞で見たりとかテレビで見たようなことが本当なんだっていうようなことが、このSSWrを始めて思いました」、「倒れかけたような家」、「足の踏み場もなく、訪問するとドアから犬とか猫の御一行様がまず出てきた後に、奥の方に子どもがもしかしているんじゃないかっていうような家」を目の当たりにし

ながら、「今まできちんとした支援を受けれず、困窮してしまったりだとか、うまく地域と関われなかったりしてきたことで、家庭自体がうまくいかなくなることも多々あるのかなと感じています」とセーフティネットの目からこぼれて地域の中で取り残されてきた多様な意味での貧困を抱える子どもや家庭へのSSWrの眼差しが見られた。また、あるSSWrは、子どもや家庭への直接的な介入を行う中で、「ベバリッジ報告〔五巨人悪〕¹を思い出してしまいました」とその環境の困難さを重く語っている。

《地域密着のSSW活動》に対する想いを多くのSSWrは抱いている。例えば、「教育事務所だとすごい閉ざされて、来る人っていうのは限定されてしまう。[活動の依頼などで] あえて呼ばれて行った先のことしか見えない」という側面や、「町のよさとか、市町村に所属をすることで、私が町をうろうろ歩いていた時でも、なんかこう把握が出来ることがあると思う。もしかしたら身近なソーシャルワークっていうのは、そこから始められるのかもしれないっていうのはすごく思いましたね」に表れるように、その地域に根ざす専門職だからこそ見える有効性がある。一方で、自身が生まれ育った地域で活動をしているSSWrは「親御さんが[SSWrの] 同級生とか、私と友だちの人が課題を抱えてる場合がありますね。そのときには、やはり若干困りますね。クライアントを個別化してみるっていうところでは、自分は業務上のソーシャルワーカーだって思っただけですけど。割り切れなさを感じる」としている。クライアント側からしてみても「語りにくさ」は発生し、SSWr自身も戸惑いの中で実践をしなければならない。地域密着での実践にはSSWrを選択できるという意味での複数配置が検討されなければならない。

《援助関係形成の困難》では、家族（保護者）の困り感の無いところでの介入の困難さがあがっている。「明らかに課題があるような状況だったりするのに、どうしてもその家族自身にその意識がなかったりする。周りから『なんとか支援してくれ』と言われながらもなかなかニーズが見いだせなくて、介入が出来なかったりする」と関係形成の入り口の部分での困難さがあげられている。「学校がSSWrを求めてきた理由とか今後して欲しいことと、家庭なり本人の想いがずれてる」場合の見極めの困難さもあげられている。しかし、そのような中であっても、SSWrは当事者主体の視点を持ち、「本当は困っているけれど[困り感を] 出せない人たちの感情をどう引き出すか」を視野に入れながらかわっている。

《SSWr自身の課題》では、女性のSSWrが父子家庭への介入を行う中で、「父子家庭には何か私は入りにくいっていうものもあるし、学校の先生と行くとちょっとまた違うし。父子家庭のお父さ

んも結構近い年代だったりとかするんですよね。そうしたらなんかこう、やっぱり[相手が] 変な感情を抱いたんじゃないかなって思った時があって。距離を置くようにして…」と感情転移への対応を客観視するコメントも見られた。また、発達障害に対する実践の強化を課題として挙げるSSWrは非常に多かった。「知識としてはある程度漠然とは知っていても、それが学校の中でどう起きているのかとか、家でどう起きているのかっていう情報も必要だし、じゃあそれを、どう具体的に手だてを打てばどう変わっていくかっていうところ[が大切]」に見られる。これは、SSWrだから知っておく必要というより、近年、子どもとかかわる様々な職種が把握しておかねばならないほどの社会的要請を受けた課題でもある。そして、ようやく対象となる子どもや家庭への介入の兆しを持てたところでの「後が無い責任」を抱えている。「SSWrにやっと繋がったケースとか失敗が出来ない。[多くの人の想いを受けて] やっと私たちが入れる、今日やっと訪問の約束が取れたとか、やっと先生がこっちにバトンを繋いでくれたから、そこでもし失敗をしたら、どこにも繋がらないし、医療にも繋がらない、いろんな相談

表1 「子どもや家庭に対するSSWrの視座」の
カテゴリ（抜粋）

《カテゴリ》	《サブカテゴリ》
《生きづらさへの理解》	〈孤立とマイナス評価〉 〈マイナス評価と無（不）理解〉 〈劣悪な家庭・生活環境〉 〈社会情勢の影響〉 〈生きづらさ〉 〈経済問題と生活困難〉 〈保護者の抱える障害や困難〉
《地域密着のSSW活動》	〈SSWr自身の生活圏と支援地域〉 〈SSWr配置レベル上の課題〉 〈地域格差と地域の変化〉
《援助関係形成の困難》	〈学校・家族・本人のニーズのズレ〉 〈ニーズ生成の困難さ〉 〈家族の困り感のなさ〉 〈子どもや家族との接触の困難さ〉 〈当事者不在の支援の危険〉 〈アウトリーチの困難さ〉 〈親の教育環境への認識や常識の変化〉
《SSWr自身の課題》	〈転移への対応〉 〈面接技術〉 〈SSWr存在の理解〉 〈発達障害の支援への困難さ〉 〈後がない責任〉

機関にも繋がらないという重みはありますよね」に示されるように、困難なケースが集積されるSSWrの心的負担が見られる。

図1に示したように、SSWrは対象となる子どもや家庭の生きづらさの先に地域社会をも見据えており、様々な問題を内包している地域での生活のしづらさを抱える対象者への支援というように捉えている。さらには、それらのかかわりを通して、SSWr自身への視点や、援助関係形成の困難さの要因として、当事者間（学校・家庭・本人）のニーズの乖離を把握していることが明らかになった。

6.2 「子どもや家庭に対するSSWrの実践知・技術」について

この項目については、《関係構築の手段と方法》、《面接技術》、《セルフマネジメント》、《寄り添う》、《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》、《第三者としての立場》の6つのカテゴリ（コア概念）が抽出された。また、それぞれのカテゴリに付随するサブカテゴリは表2に示すとおりである。

《関係構築の手段と方法》では、時間をかけた丁寧なかかわりが示されている。例えば、「サッカーの話」や「漫画が好きなら漫画の話」をしたりするなど、「普段のその面接技術とは違った、違うような空間を作り出す」という配慮の中で、子どもの持つ文化や価値観にふれながら、子どもの世界に入り込んでいる。

《面接技術》について集約して語られた内容として、「例えば辛い事や今困っている事っていうのもリフレーミングしたりする作業はしながら、やはりもう傾聴と共感と、エンパワメントの視点とストレングス視点[を重視している]」がある。不登校への支援、あるいは、問題解決という学校側のニーズからスタートし、子どもや保護者との面接に臨む際、どうしても課題から入りがちであるが、このように積極的に評価する視点を持ち、言葉や雰囲気や相手にそれを返していくことで関係性は向上し、支援の幅は広がる。さらに、「そのとき何をどう感じたかというところをなるべく感情として子どもたちに表現させる」、「ナラティブアプローチ」といった感情表出や自由な雰囲気

の中での語りに重きを置いている。その関係性をうまく育んでいる要因には「ユーモアで和ませる。和ませて…中には自己開示を深くする場合もあります」といった経験豊かな専門職がゆえに交わせる相互作用もあった。

《セルフマネジメント》は、厳しい環境の中で生きる子どもや家庭に対するかかわりの中に身を置くSSWrの自己統制の表れであろう。「自分をベストな状態に常に持って[対象者と]かかわる」、「イラってすることがあったら、クールダウンしてから家庭に行く」など、「自分がどういう風にすると相手にどう伝わるのかとか、[自分の相手への]見せ方みたいな、そういうところは気をつけている」に見られるように、先に述べた「後のない責任感」から表れるかかわりへの真剣・謙虚な姿勢である。また、ごく個別的な対応であるが、SSWrの雇用形態上の時間的・物理的制限から「会える時間が短かったりとか制限をされる」ため、「いつでも[電話を]かけられる人がいるって、思うだけでやっぱり安心感になるので、携帯の番号は出来るだけ教えるようにしている」SSWrも存在する。ただし、「一応のルール」を設定している。連絡先を開示することで、「教えてくれたっていうことでのその心理的な距離であつたりとか、安心感っていうところでは、もうできるだけ教えるようにしてます。これは医療[分野で勤務していた時]とかではありえなかったことですよね」に見られるように、これまで学校以外と「つながる」ことができなかった家庭への「人対人」としての情緒的関与や繋がりがこの分野では重要な役割を果たしているといえる。

《寄り添う》とはかなり抽象的な表現であるが「どれだけ[クライアントの]感情の部分に入っていけるかっていうのは[意識している]」に表出されたように、技術的な部分では「代弁機能」や「受容と肯定」、「配慮」などがあるが、最終的にはパワーレスに陥っている子どもや家庭への第一義的なかかわりの視座が抽出されたものとなった。広義の「気遣い」や「気懸かりを聴く」という根本的な姿勢である²。そこでは、子どもや家庭の状況を「今の状況がある程度肯定できていなかったり、自尊感情が育っていないと先のことが見えない」とし、だからこそ、「今の状態を肯定し

ていくことが大事」としている。これらのことは、先に述べてきた《関係構築の手段と方法》や、《面接技術》の基盤となっているのではないか。さらにこれに合わせて、「すごく SSWr のキャパシティというか、許容範囲って、ものすごく広がってきてると思うんです。結局どんな家族もあり、どんな子どももあり、精一杯生きているってことが事実だから、[それを受容し、肯定していく] そこだけですね」に表されたように、この分野では「受容や肯定、共感」に対するさらに広い範囲での SSWr のある種の「構え」が求められるといえよう。

《基盤となる SW 実践知識・技術》が抽出されている。学校でのソーシャルワーク実践とはいえ、基盤となる実践知識や技術に大きな乖離はないというのが多くの SSWr の意見であった。特に、「社会保障とか、今までの実践や経験の中で[培われてきたものは]ある程度わかりますよね」という発言であったり、「精神医学的知識」や「発達障害」へのかかわりについては、積極的にコンサルテーションを受けるようにしている。こういった対応はどの分野のソーシャルワーク実践においても共通するものである。

《第三者としての立場》には二つの側面が見られた。一つは、「学校の先生と一緒に訪問しながらも、あえて学校の職員とは違いますっていう様な存在で接したり」や、「学校に巡回はしてるけど、『学校とは別の機関にいて、いろんなところで困ったこととかを、お手伝いするような仕事します』と言って、『学校とはちょっと違うんですよ』っていう様なことをすごくアピールすることにはしています」に見られるように、学校と違う存在を強く意識付け、介入の窓口を広げる意味で用いている場合である。もう一つは、「『課題を抱えてる子どもは支援を受けなければならない』に極めて近い感覚」を持ち、第三者が家庭に介入することの理由や本質を保護者や教師に強いメッセージとして持たせる事としての意味である。

図2に示したように、SSWr に特徴的な技術や知識について語りだす前に、多くの SSWr は《基盤となる SW 実践知識・技術》を前提に挙げた。これは、特徴あるとされる SSW 実践の根底に、まずもって基礎知識・技術が重要であることを改

表2 「子どもや家庭に対する SSWr の実践知・技術」のカテゴリ（抜粋）

《カテゴリ》	《サブカテゴリ》
《関係構築の手段と方法》	〈子どもの立場に立つ〉 〈多様な関係構築手段・方法〉 〈信頼関係〉 〈感じとる力〉
《面接技術》	〈面接での視線・声のトーン〉 〈面接場所や時間への配慮〉 〈丁寧な面接と粘り強さ〉 〈カウンセリング技術〉 〈ナラティブ〉 〈言い換え〉
《セルフマネジメント》	〈連絡先の開示とルール〉 〈自己開示とそのレベル〉 〈援助者としての自分への配慮〉
《寄り添う》	〈受容と肯定〉 〈代弁機能〉 〈家族の気持ちへの配慮〉 〈親の葛藤への配慮〉 〈繋ぎ方への配慮〉 〈向き合う〉 〈希望を持ったかかわり〉 〈リフレーミング〉 〈ストレングス視点〉 〈価値観の肯定〉 〈ユーモア〉
《基盤となるソーシャルワーク実践知識・技術》	〈SSWr 自身の経験〉 〈ソーシャルワーカーとしての基本的知識・技術〉 〈バイステックの7原則〉 〈メンタルヘルスに関する知識・技術〉 〈発達障害に関する知識・技術〉
《第三者としての立場》	〈中立性〉 〈第三者の視点〉 〈教師とは違う存在〉

めて示す結果となった。さらに、《第三者としての立場》を有効に活用していることが分かる。調査対象者は所属機関とはことなる組織である学校へいわゆる派遣型の形態を採っているが、それ故、客観的なかかわりを持つことが出来ていたり、学校の教職員ではない第三者が故に構築することが出来る関係性を切り口に、かかわりを持てていることが明らかになった。

6.3 「スクールソーシャルワーク実践における専門職としての価値観」について

この項目については、《子どもと学校のエンパワメント》、《当事者主体》、《視点の共有化》、《地域支援》、《内省・自己覚知》の5つのカテゴリ（コア概念）が抽出された。また、それぞれのカテゴリに付随するサブカテゴリは表3に示すと

りである。

《子どもと学校のエンパワメント》は、「誰もがいい方向に向くような。一番はやはり子どもだと思うんですけど、子どもと家庭、先生、地域、なるべくそういった方がすべていい方向に向いていけるように」に表されるように、子どもだけでなく家庭や学校、地域社会に対する取り組みを続けてきたSSWrの重要な価値観でもあり、この事がSSWrの社会的責務を指し示すものといえる。そこでは具体的に、「私もずっと一生その子と付き合えるわけではない」を前提としながら、「挫折感とかを抱える子どもたち、もちろん自己肯定感とかもないですし。そんな中で、自分自身の力を回復していくっていうか、そういった力を持って[欲しい]」という想いを抱えている。さらに、子どもや家庭を「課題を抱えるっていうよりも、課題に挑戦する」とし、彼らを「挑戦する力や権利のある存在」としてエンパワメントする／される(SSWr自身もする／される)事を認識していた。

《当事者主体》は、基本的人権の尊重や個別性の尊重といったソーシャルワークの根幹にかかる価値観として語りの中から抽出された。そこでは、「やっぱりひとつひとつの命の大切さというか、その人その人の存在の大事さというか、そこをすごく大事にしています」や、「最終的に誰のためなのか。色々な人生があっていいわけだから。絶対こっちのこういう人生がいいというルールは敷きたくない[敷けない]。ただ、本人が、本来そうしたほうがいいけれども、それが奪われているということであれば一緒に考える必要がある」が挙げられている。また、「子どもの人権を守るというか。やっぱりそこを守るためにというか、彼らが[学校に]行きやすくなるためにっていうのは基本にある。[教師に]嫌われる、これを言ったらやりにくくなるかな[と思いつつも]、『子どものためだから』って思って踏み出す」に示されるように、子どもや家庭に寄り添いながら(寄り添うために)、教師と向き合う作業もここでは見られている。また、コンサルテーション業務やケース会議への参加など、間接支援に偏りがちな現状の中で、〈直接支援への想い〉もこの中で語られている。

《視点の共有化》では、SSWrが持つ視点と教育に関する分野やその文化のそれとを重ね合わせていく必要性が訴えられている。具体的には、SSWrが「不登校っていうのが必ずしも否定的な言葉じゃない」という考えに立ち、「ある意味、不登校という自己選択が出来た子ども」との前提に立っているのである。さらにその前提をもとに、「この中学校に行けないのであれば、例えばフリースクールとか、そういういくつかの選択肢から選んで、ここに行けなかったらここに行けばいい。…なんかいくつかの選択肢があって。そういったチャンネルをいろいろつくって、サービスをいろいろ提供して、初めて義務教育って言うていいのかなっていう感じがしますね」と述べられている。これは単に学校やそこで培われてきた文化を批判しているものではなく、先に述べた《急激な社会変化と学校の役割》の中で、教育とソーシャルワークの視点を重ね合わせながら、新しい文化を模索していくことへの提案でもある。

《地域支援》は、SSWrが支援を行う上で、その視点の先が子どもや家庭、学校だけでなく、広く地域社会を捉えていることから抽出された。そこでは、「学校っていうものを一つの集団として考える。コミュニティとかですね」とし、「コミュニティの中の学校」が強く意識されている。そして、不登校問題を子どもや家庭、学校という枠内で考えるのではなく、「不登校を生み出す地域」つまり、「そういう[不登校の]子どもさんたちがいる地域もクライアントである」として、SSWrが「第一線で働くコミュニティワーカーそのもの」としての認識を持って活動している。さらに不登校や引きこもりの子ども、あるいはそれを抱える家庭への支援を行っている現状から、「将来的に各種の疾患、精神障害を起こすであろうクライアントの予防的な意味も持つと思いますね」とし、地域住民(国民)の精神保健の向上に寄与するという精神保健福祉士の社会的使命をも根底に抱えていることが明らかになった。

《内省・自己覚知》では、「せっかくのチャンスをうまく活用したり、もう少しなんかうまく介入したら何か出来たんじゃないかなというふうに思う」という自身の活動への内省的な心情も語られている。専門職がゆえに出てくる課題であろう。先

表3 SSWrの「SSW実践における専門職としての価値観」のカテゴリ（抜粋）

《カテゴリ》	《サブカテゴリ》
《子どもと学校のエンパワメント》	〈関係者の福祉の向上〉 〈ファーストクライアントとしての教師〉 〈教師への支援〉 〈子どものエンパワメント〉 〈課題の捉え方の変容〉 〈レジリエンス〉 〈ストレングス視点〉
《当事者主体》	〈怒りは無意味〉 〈子どもの権利擁護と社会的責任〉 〈子どもの最善の利益〉 〈子どもを中心とした支援〉 〈親の困り感を大切に〉 〈当事者の人生を考える〉 〈価値観の重ねあわせ〉 〈直接支援への想い〉 〈契約の必要性〉
《視点の共有化》	〈協働〉 〈関係作り〉 〈不登校という選択をできた存在〉
《地域支援》	〈コミュニティの中の学校〉 〈地域の特徴への関心と配慮〉 〈他機関・環境との連携〉 〈地域の捉え方〉 〈予防的な取り組み〉 〈市町村配置への想い〉
《内省・自己覚知》	〈SSWr自身もクライアント〉 〈最善の方法を考え続ける（内省）〉

にスーパービジョンの必要性やSSW体制の課題としても挙げたが、「なにが困っているのか〔自分で〕語れる。クライアントに語ってもらえるように。私たちがクライアントなんだっていう考え方ですね。『私の支援の仕方はよかったのかな』っていう振り返り、スーパービジョン体制っていうのをきちんととっていけば、出来ると思いますので」に有意に示されている。

図3に示したように、SSWrは《視点の共有化》を中心にその価値を構成している。対象となる子どもや家庭にかかわりを持つ支援者たちと《子どもと学校のエンパワメント》、その先にある《地域支援》、そして《当事者主体》について共通の考え方を持つことを根底においている（価値の表れ）ことが明らかになった。《当事者主体》は、社会福祉専門職の共通基盤であり、その職能団体である日本社会福祉士会や日本精神保健福祉士協会の倫理綱領にも示されているものである。こういった事項を常に自省しつつ、専門職としての自己と向き合い、《内省・自己覚知》していることが明らかになった。

7. 考 察

さて、本研究の主眼はSSWrの実践経験を丁

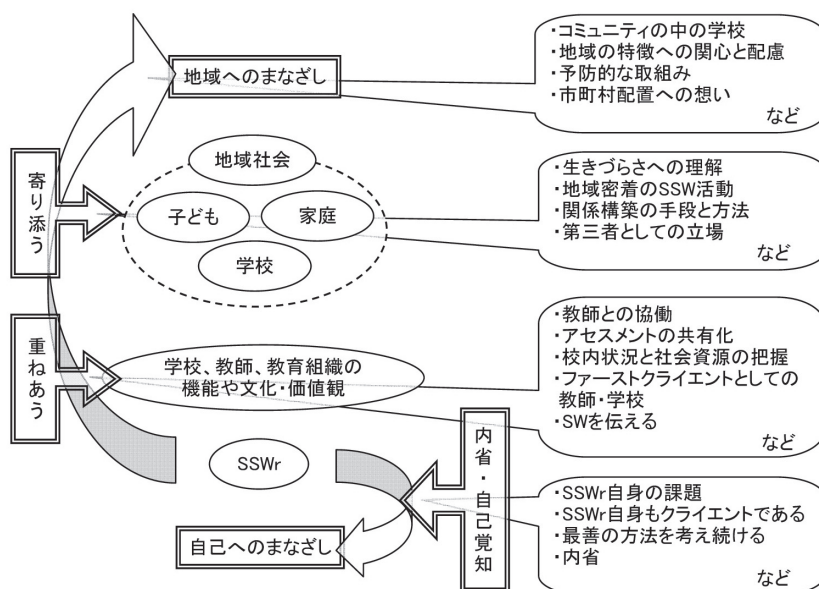


図4 「スクールソーシャルワーカーの視座とかかわり」の概念構造図

寧に振返り、SSWr が学校や児童生徒、家庭をどのように捉えてきたかを明らかにし、そこに生ずる課題や根底にある価値観を分析することであった。図4で示すように、その全体の概念構造図を概観しながら、本研究の全体を振返り、以下の二つの点から得られたデータに接近することで、本研究の考察としたい。

7.1 「寄り添う」と「重ねあう」

SSWr はその実践の中で、当事者主体を意識しつつ、子どもや家庭に関わってきた。そのことは「寄り添う」に集約されたが、そこには「エンパワメント」の視点や「ストレングス」「リジリエンス」「リフレーミング」など、(周囲から見れば)どのような困難な状況でも、彼らを肯定的に捉えてきた事実がある。「受容」や「共感」「傾聴」といった基本的な態度を尊重しつつ、そこからさらに一歩踏み出した視点がそこにはあったのではない。さらに、この「寄り添う」は、困難なケースを抱えながら、日々子どもと向き合う学校現場の教師たちに対しても同義であった。《ファーストクライアントとしての教師・学校》という部分からも明確である。

「重ねあう」は教育の視点とソーシャルワークの視点を「重ねあう」事である。当初、新しい分野での実践に驚きや戸惑い、揺らぎといった感情を持ちながらも、ソーシャルワークの視点を他者に押し付けるのではなく、相互の視点を「重ねあう」事で、SSWr 自身も新たな知見を得て、活動することが出来たのも事実であろう。「重なり合った視座」が、今後ゆるやかに学校や地域社会に変革を促す可能性を秘めている。

7.2 「地域へのまなざし」と「自己へのまなざし」

SSWr は、子どもや家庭、学校とかかわりながら、その先にある「地域」を常にターゲットに捉えている。教育事務所や教育委員会での配置であり、非常に広範な地域を限られた人員で対応している現状がある。直接的なネットワークの構築には有限性があり、抱え込みになりがちになったり、燃え尽きそうになったりする中でも、「目の前の支援を通じて、いかに地域社会に寄与できるか。」

を意識していた。それは社会福祉士や精神保健福祉士ならずとも、多くの専門職が保有する本質的命題である。新しい領域でソーシャルワーク実践を行うという専門性を担保しつつ、各地域での複数配置や地域性に配慮したSSWr の配置が必要になってくる。

また、インタビューの中で学校や子ども・家庭に対する考えを問う中で、《内省・自己覚知》に関することや《SSWr 自身の課題》、《スーパービジョンの必要性》が多く語られたのも特徴である。それは、「自己へのまなざし」つまり「自己を客観視する」事が出来ているということである。社会福祉の理論と実践の統合は「①思い出してみる(想起): Retrieval ②考えてみる(自省): Reflection ③結びつける(結合): Linkage ④専門職としての対応: Professional Response」の繰り返しである(Bogo, M. & Vayda, E. 1986)。今後もその機会を保持し、新しい分野での新しい実践を構築し続けていく必要がある。

7.3 本研究の限界と課題

本研究は、調査・分析者自身もSSWr 経験者であった。そのことを考慮し、それについての客観性や中立性に関する検証はなされていない。しかし、そのことはインタビューの段階から調査対象者と調査・分析者間に共通の意識や共通言語があったことで有意に作用したとも考えられる。さらに、本研究は熊本県というごく限られた地域での実践を般化したものである。これらについては現時点での本研究の限界であり、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究は、10名の現任SSWr に快くインタビューへの承諾を頂き、それへの丁寧な応答があり、質の高いデータが得られた結果から生み出されたものである。心からお礼を申し上げたい。また、この分析の中で極めて内容のある、質の高いSSWr の実践を明らかにすることができた。これは、熊本県におけるソーシャルワーカーの専門職団体(熊本県社会福祉士会、熊本県精神保健福祉士協会)の強力な支援の下、熊本県教育委員会に経験豊かな専門職がSSWr として採用され、円滑に活動してこられたことの表

れでもある。関係された全ての方々へ感謝の意を表し、本論考を閉じたい。

（本研究は2010年に刊行された『熊本県におけるスクールソーシャルワーク実践に関する調査研究・活動報告書』の一部に加筆修正を行い、再構成したものである。）

脚 注

- ¹ ベバリッジ報告（*Beveridge Report—Social Insurance and Allied Services*）：過去の社会保険および関連諸制度の抜本的改革により国が国民生活の最低水準（national minimum）を統一的・包括的に保障することを提唱し、のちのイギリス福祉国家の基礎を形づくった。この報告書の中で、社会の発展を阻む「5つの巨人（社会悪）」（窮乏、疾病、無知、不潔、失業）への広範な社会政策の必要性を強調した（田畑2004）。
- ² 「気遣い」や「気懸かりを聴く」については、村田（1998）に詳しい。

引用・参考文献

- 秋山智久（2005）『社会福祉実践論—方法原理・専門職・価値観—〔改訂版〕』ミネルヴァ書房。
- 秋山博介（2009）「スクールソーシャルワークの今後と課題」『実践女子大学生活科学部紀要』46, 29-41
- 大塚美和子（2007）「スクールソーシャルワークに必要なスキル—大阪府スクールソーシャルワーク事業における地区活動の取り組みから—」『学校ソーシャルワーク研究』1, 79-85。
- 大塚美和子（2008）「スクールソーシャルワークの理論」日本スクールソーシャルワーク協会編『スクールソーシャルワーク論—歴史・理論・実践—』学苑社, 61-74。
- 大西良（2009）「不登校事例におけるスクールソーシャルワークの実践—エコマップを用いた役割評価を中心に—」『福岡県社会福祉士会研究誌』3, 14-22。
- 尾崎新（1999）『ゆらぐことのできる力』誠信書房。
- 萱間真美（2007）『質的研究実践ノート—研究プロセスを進める clue とポイント—』医学書院。
- 小榮住まゆ子（2010）「スクールソーシャルワーク実践におけるチームアプローチ—行動変容アプローチによる実践事例考察を通じて—」『同朋福祉』16, 137-156。
- 久保紘章（2005）『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで—』川島書店。
- 田畑洋一（2004）『現代社会保障論』学文社, 2。
- 土井幸治（2011）「全国自治体調査から見えるスクールソーシャルワーカーの配置状況の実態」日本学校ソーシャルワーク学会『学校ソーシャルワーク研究（報告書）』, 3-40
- 村田久行（1998）『ケアの思想と対人援助—終末期医療と福祉の現場から—』川島書店。
- 山下英三郎（2008a）「子どもたちの現状とスクールソーシャルワーク」日本スクールソーシャルワーク協会編『スクールソーシャルワーク論—歴史・理論・実践—』学苑社, 16。
- 山下英三郎（2008b）前掲書, 17。
- Bogo, M. & Vayda, E. (1986) *The Practice of Field Instruction in Social Work Theory and Process*, University of Toronto Press, 2.
- Greene, R. R. (1991) *Human Behavior Theory and Social Work Practice* 三友雅夫ほか監訳（2006）『ソーシャルワークの基礎理論—人間行動と社会システム—』（株）みらい。
- Flick, U. (1995) *QUALITATIVE FORSCHUNG* 小田博志ほか訳（2002）『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論—』春秋社。
- （2011. 2. 28 受稿, 2011. 3. 25 受理）

A practical analysis of the values and perceptions of school social workers on school children and their family environment

Takuya CHAYAMICHI & Yasushi IWANAGA

This study was carried out in order to understand and describe the children and the homes in which school social workers (SSWr) became involved, and to understand the sense of values as related to the profession. Individual interviews (semi-structured interviews) were conducted with 10 SSWr workers, and the results were analyzed according to qualitative research methods. As a result, the understanding that lifestyles were difficult, and the SSW community activities have been identified as core concepts in “perceptions of SSWr to the child and the home”. Moreover, the shared perspectives and self-reflection were examined in “Sense of values in the SSW practice as the profession” in “Practical knowledge and technology of SSWr to the child and the home” in regards to being personally involved, and from the viewpoint of the third party. In addition, it was clarified that SSWr were able to understand the children, their home life, and the schools while overlapping their roles and sense of values with people of various occupations and occupational categories, drew close to the children, and fulfilled their obligation while practicing self-introspection on their profession.

Key words: School social workers, Perceptions, Sense of values, Qualitative study